

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 27 年 6 月 24 日現在

機関番号：32678

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2014

課題番号：23520039

研究課題名(和文) 地域コミュニティの日常に出発し日常に還る倫理(エートス)の研究

研究課題名(英文) Ethical studies on the gradual change of Ethos among local communities from the viewpoint of the ordinary

研究代表者

山本 史華 (YAMAMOTO, Fumika)

東京都市大学・その他部局等・准教授

研究者番号：20396451

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,000,000円

研究成果の概要(和文)：本プロジェクトは、エートスの探究という倫理学の原義に戻り、地域コミュニティで日常的に共有されているエートスの現状把握から出発し、そのエートスを倫理的に善い方向へと組み換えていくことを目指した。

以上の目的遂行のために「理論的研究」「実践活動」「調査研究」の三つの方法でアプローチを試みた。理論的研究では、低線量被曝がエートスを変容させてしまう問題を主に扱い、実践活動としては地域運営学校で生命倫理ワークショップを開いた。そして調査研究では、エートスの地域差を考察するために、2015年3月に都市部と地方部において2つの調査を実施した。1つは児童を対象とし、もう1つは地域住民を対象としたものである。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this project is, by returning to the original meaning of the word ethics, to grasp Ethos shared routinely in the local community and to rearrange the Ethos ethically in a positive direction.

The study employed the following approaches: theoretical approach, practical activity and questionnaire survey. In the theoretical approach we dealt with the issue of low-dose radiation exposure after 3.11, which would have the potential to transform Ethos. As practical activity, we held a bioethics workshop every year at a community school and taught ethical problems to elementary school students. Regarding the questionnaire survey, Ethos appears in the relationship between adults and children in daily life, especially in the participation of local residents in school education. In order to consider regional differences in Ethos, we conducted two surveys in urban and rural areas in Mach, 2015. One targeted children, the other targeted local residents.

研究分野：哲学・倫理学

キーワード：エートス 日常 地域コミュニティ 地域運営学校 初等教育 ポスト3.11 生命倫理

### 1. 研究開始当初の背景

2004年6月に「地方教育行政の組織及び運営に関する法律」が改正され、学校運営協議会制度が導入された。以後、各地域の教育委員会によって「地域が運営に参画する新しいタイプの公立学校」すなわち「地域運営学校(コミュニティ・スクール)」（以下、CSと略称）の指定を受ける公立学校が増えていき、その数は、本プロジェクトが始まる前の2010年4月1日現在で629校に至っていた。

CS導入の目的を文部科学省は「学校・家庭・地域社会が一体となってより良い教育の実現に取り組む」こと、「地域の創意工夫を活かした特色ある学校づくりが進む」こと、さらに「地域全体の活性化」にあると説明する。しかし社会を「公」「共」「私」の三領域に分けるならば、CS構想は、理念としては地域コミュニティの「共」に多くの役割分担を求めるものの、現実的には「公」主導で行われるという矛盾を孕んでおり、地域コミュニティの人的ネットワークとそれに支えられた諸活動が自主的に育たなければ、構想は早晚行き詰まることが予想された。

一方、倫理学は、もともと、ある集団・ある時代がもつ持続的な特徴、すなわち、エートスを研究する学問であったが、社会学や社会心理学の誕生、そしてメタ倫理学の流行などにより、本来の研究対象であるエートスから離れてしまっていた。

本プロジェクトは、以上のような背景のもと、CSを地域コミュニティの核として機能させるために、エートス探究としての倫理学が、どのような積極的なかわりかたができるのかを構想するところから始められた。

### 2. 研究の目的

本プロジェクトは、倫理学の原義である「ある集団・ある時代がもつ持続的な特徴、すなわち、エートスの研究」にもう一度立ち戻り、地域コミュニティで日常的に共有されているエートスの現状把握から出発し、そのエートスを倫理的に善い方向へと組み換えていくことを目的とした。

以上の目的遂行のための場としては、教会が地域コミュニティの核の役割を果たしていない日本ではCS以外にはあり得ない、と考えた。本プロジェクトの方向性は、文科省がトップダウン的にさまざまな役割をCSに意味づけするのと真逆の方法であり、ボトムアップ的にCSの役割を構築するものである。

そして、この構想が順調に機能し、地域コミュニティのエートスが、真の意味で倫理的に変容し続けるためには、研究者が介入しなくなった後も、地域コミュニティの人的ネットワークに支えられて倫理的諸活動が自主的に維持されること、つまり、倫理的諸活動が日常の風景になることが必要であり、最終的には、その基盤づくりを目指した。

また、本プロジェクト遂行中の2011年3月11日に東日本大震災と福島第一原発事故

が起きた。特に、福島第一原発事故により、福島県の一部の地域コミュニティは帰還困難区域、居住制限区域などに分類されてしまった。さらに、十分な科学的エビデンスに欠ける低線量被曝の問題が、地域の住民をはじめ、多くの市民に不安を与えることになった。この問題には、地域コミュニティのエートス変容を主題とする本プロジェクトも積極的に関与すべきと考え、急遽、3.11の倫理的探究、特に低線量被曝の倫理的探究を追加した。

### 3. 研究の方法

地域コミュニティのエートス変容に関して、【理論的探究】と【実践活動】(山本担当)【調査研究】(井上、稲葉担当)の三つの方法でアプローチを試みた。

#### 【理論的研究】

「理論的研究」では、地域コミュニティでどのようなエートスが現在共有されているかの考察、そして現代倫理学研究の中での本研究の位置づけを明らかにすることを試みた。また、低線量被曝の何が問題であり、それを生命倫理学が取り扱っていくには、どうすればよいのかの考察を行った。

#### 【実践的研究】

「実践活動」では、世田谷区立T小学校に協力を依頼して、夏期に行われる「カルチャー・スクール」やキャリア教育の授業などで、こどもの脳死臓器移植問題などを扱い、自分で考える倫理・哲学教育を行った。倫理では、身近な問題を自分の頭で考え、社会の中での自分の立ち位置を知ることが重要であることを伝えていった。

#### 【調査研究】

井上と稲葉は、「エートス」を人びとに共有されている心的態度や行為の傾向性ととらえ、地域コミュニティでの日常的な子どもと大人とのかわりや地域住民の学校教育への関心のなかに「エートス」の地域差や変化の兆しを探った。具体的には、地域社会のありかたや人びとのライフスタイルに違いがあると思われる「都市部」と「地方部」において、ヒアリングと2種類の質問紙調査を実施した。

調査の概要は以下の通り。

調査名称	【子ども調査】	【地域住民調査】
調査項目	地域における日常的な活動、地域での人間関係、地域への満足度、学校への期待や参加意欲、地域にかかわる教育(学習)活動への関心、進路意識、自己像など。	
調査時期	2014年3月	
調査対象	E学校(都市部) F学校(都市部) G学校(地方部) H学校(地方部) の小学4~5年生	E学区(都市部) F学区(都市部) G学区(地方部) H学区(地方部) の地域住民
サンプル数	554	536

### 4. 研究成果

#### 【理論的研究】

理論的研究としては、終始、日常性と倫理のかかわりという観点から考察を行った。

まず、高レベル放射性廃棄物と脳死を日常の観点からとらえ直すことで、一見無関係に思われる両者の間に伏在するエートスの抽出を試みたものが〔雑誌論文〕の4である。両者は、科学技術の発展に伴って生じたものであり、前者は物質に関わることで、後者は概念にかかわることである。日常を緩やかに変容させていく点では共通するが、実は、日常にはそぐわない形で進展している。高レベル放射性廃棄物は、安全になるまでに10万年もの時間を要し、人間の日常生活の範囲をはるかに逸脱しているし、脳死は、死が本来は人間の経験や想像の域を超える形而上学的問題であるにも関わらず、臓器移植の必要性という形而下の要請から、日常の観点からは死者とは思えない者を死んだと見做すからである。そのため、日常を生きる人間が責任をとれない事態が出来ている。

さらに、2012年の東北哲学会第62回研究大会のシンポジウム「ポスト3.11の哲学・倫理的課題」において山本は「日常と疑似形而上学」と題した発表を行い、それを論文にまとめたのが〔雑誌論文〕の2である。この論文では、再度、高レベル放射性廃棄物と脳死の問題を取り上げ、前者を時間的逸脱、後者を概念的逸脱として整理した。そして、現代の科学・技術があまりにも大きな影響力を持つに至って、それまで批判の対象だった形而上学へ逆に接近する事態を招いていること、言い換えれば、科学がまさに疑似形而上学の様相を呈するようになった結果、それらの逸脱が起きた、と指摘した。

一方、3.11、特に福島第一原発事故がもたらした問題の一つに低線量被曝がある。低線量被曝は、いままさに起こりつつある現在進行形の問題であり、その問題により福島県の住民は除染や健康管理、そして避難生活を強いられているのであるから、日常を大きく変容させる深刻な問題の一つだといえる。低線量被曝で害を受けるのは生命であり、健康であるわけだが、その倫理を扱う生命倫理学は低線量被曝を主題として扱い得ていない。それは何故であるのか、また、生命倫理学が今後低線量被曝を主題にしていくためにはどうすればよいのかを考察し、発表したのが〔学会発表〕の1であり、その内容を論文としてまとめたものが〔雑誌論文〕の1である。この問題は、世界のどこかで原発事故が起きれば同様の事態が起きることから、いち早く日本から世界へと発信していくべきテーマであると考え、国際学会で発表し、英語論文にまとめた。

生命倫理学が医学や医療の現場で起こる諸問題を解決する方法は、原則論や決疑論などがあるが、この論文ではピーチャムとチルドレスによってまとめられた四原則に着目した。しかし、四原則が扱う範囲は、健康と病気を対立させてみた場合、病気の領域に関することである。では、健康についての倫理原則は何があるかといえ、予防原則が考えられるが、予防原則が扱う範囲は、マクロ的視座とミクロ的視座を対立軸としてみると、マクロ的視座に限定される。つまり、健康の領域を対象としながら、かつ、ミクロ的な視座を扱う倫理原則が生命倫理学には欠けている。しかし、まさに低線量被曝はその領域

で進行しているため、その領域に関する新しい原則(例えば「個々の命に配慮せよ」など)を打ち立て、その原則を予防原則へと橋渡しすることが求められている、と論じた。

#### 【実践活動】

実践活動としては、世田谷区立T小学校において、2011年から2014年にわたって、夏季休業期間中に行われる「カルチャー・スクール」で「いのちを考える」と題した倫理ワークショップを行った。改正臓器移植法で15歳未満のこどもの脳死臓器移植が可能になったが、この問題は初等教育の現場ではほとんど扱われておらず、倫理教育としては適切なものと考えた。

このワークショップで得られた知見は、下記の〔学会発表〕の3で報告した。また、ワークショップでのこどもの反応を基に、子どもの意思を移植に適切に反映させるための提言を行ったのが〔雑誌論文〕の5である。

#### 【調査活動】

調査研究の成果は、下記の通りである。

(1) 4つの地域(学校区)の特徴  
はじめに、調査を実施した4地域(学校区)の特徴を簡単に述べておこう。

都市部のE地域とF地域は、「山の手」の落ち着いた住宅街のイメージがある東京都S区にある。この2つの地域は学校区としては隣接していないが、同じような文化圏・経済圏にあると言える。E校は2007年度に、また、F校は2012年度教育委員会から「コミュニティ・スクール(地域運営学校)」の指定を受け、学校と地域との連携・協働が進められている。

G地域(中部)とH地域(近畿)は、交通の便が良くない地方部に位置する。G地域では、基盤産業である農業は衰退傾向にあるが、隣接する市にある自動車工場などに勤める若い世代が流入し、子どもの数は増加している。自治会の活動も活発であり、G校は地域に支えられた特色ある教育活動も行われている(G校は2014年度にCSとなった)。

過疎化・高齢化が進むH地域では、複式学級を解消するために小学校が統廃合され、2011年にH校が開校した。そのため、地域全体で新しい学校をもち立てようという雰囲気があり、児童全員が兄弟姉妹のような環境で学んでいる(H校は、調査時点ではCSには指定されていない)。

(2) 子どもと地域コミュニティ

表1は、子どもたちに「地域での体験」をたずねた結果の一部である。この表からは、都市部のE校やF校は、「1. 地域の公園で遊んだ」や「3. 地域の図書館や児童館を利用した」の数値が高いことがわかる。他方、地方部のH校は「2. 地域のお祭りに行った」や「4. 地域のイベントに参加した」で「とても+わりとある」が7割を超えている。H校のサンプル数が18と少ないことを考慮しなくてはならないが、過疎地の小規模校ならではの地域に根づいた体験が窺われる。G校も「4. 地域のイベント」や「5. 地域でボランティア活動」が多いのが特徴である。

表1 子どもたちの地域での体験 × 学校 (%)

	E校 (n=278)	F校 (n=128)	G校 (n=130)	H校 (n=18)
1. 地域(まち)の公園で遊んだこと	86.7	75.0	50.8	46.6
2. 地域(まち)のお祭り(ぼんおどりなど)に行ったこと	59.1	63.3	60.8	76.5
3. 地域(まち)の図書館や児童館を利用したこと	60.1	77.3	35.4	8.3
4. 地域(まち)のイベントに参加したこと	37.6	40.7	58.9	72.2
5. 地域(まち)でボランティア活動をしたこと	8.3	27.4	36.0	22.2
6. 地域(まち)の道路や駐車場で遊んだこと	16.2	6.3	34.6	16.7

「とても+わりとある」の数値。  
4 学校区の数値を比較して、最大値に□、二番目に■、最小値に\_を付けた。

このように、子どもたちの「地域での体験」は「都市部」と「地方部」で対称的な傾向があるが、そうした枠組みではとらえられないものもある。その1つが普段の「子どもと大人との関係性」である。

続いて表2は、子どもたちに「近所の大人とのかかわり」についてたずねた結果を整理したものである。

これを見ると、全ての質問項目でH校が最大値を示していることが目をひくが、同校が過疎地に所在しており、物心つくころから近所の大人と顔なじみであるような関係であれば、「1. 近所の大人の人に会ったら、あいさつをする」、「2. 困ったときには、近所の大人が助けてくれる」、「3. 良いことをしたら、ほめられる」といった日常的なかかわりが良好であるのも納得できる。

そうした観点からは、都市部に位置するE校で、近所の大人の人が「2. 困ったときには、助けてくれる」、「3. 良いことをしたら、ほめられる」、「5. 悪いことをしたら、叱られる」という数値が高いことに注目したい。

表2 近所の大人とのかかわり × 学校 (%)

	E校 (n=278)	F校 (n=128)	G校 (n=130)	H校 (n=18)
1. 近所の大人の人に会ったら、あいさつをする	70.4	71.9	74.7	83.4
2. 困ったときには、近所の大人の人が助けてくれる	52.9	45.4	35.4	66.6
3. 良いことをしたら、近所の大人の人にほめられる	45.0	39.1	40.7	55.6
4. 近所の大人の人と、いろんな話をする	29.3	21.9	28.4	38.9
5. 悪いことをしたら、近所の大人の人に叱られる	24.7	7.5	23.9	27.8

「とても+わりとそう」の数値  
4 学校区の数値を比較して、最大値に□、2番目高い値に■、最小値に\_を付けた。

他方で、G校(地方部)は「近所の大人の人に「1. あいさつ」は7割強の子どもがしているが、「2. 困ったときには、助けてくれる」と感じているのは3割強と半減している。困ったときには大人が助けてくれるはずだが、

そうした大人の思いが子どもに伝わっていないのはなぜだろうか。また、F校(都市部)では、「3. ほめられる」、「4. いろんな話をする」、「5. 叱られる」などの近所の大人とのかかわりは総じて数値が低い。特に「5. 叱られる」は7.5%と、他の地域に比べて極端に少ない。F校の子どもは「よい子」なのかもしれないが、やや気がかりなデータである。

このように「都市部」と「地方部」を比較しながらデータを分析・解釈していくと、「都市部」と「地方部」という枠組みを超えて類似あるいは相違している部分もあることに気づかされる。

### (3) 地域住民と地域コミュニティ

続いて表3は、「どんな地域であるか」を地域住民にたずねた結果を整理したものである。

表3 どんな地域か × 学校区 (%)

	E 学校区 (n=130)	F 学校区 (n=147)	G 学校区 (n=149)	H 学校区 (n=110)
1. 自然が豊かである*	46.9	20.4	83.2	99.0
2. 生活するのに便利である*	84.6	70.0	34.2	9.1
3. お祭りなど楽しみなイベントがある*	67.7	49.7	37.6	28.1
4. 転居してきた人でも、馴染みやすい*	55.9	24.6	30.4	21.4
5. 文化が豊かである*	40.7	16.4	31.1	49.0
6. これから発展していく雰囲気がある*	34.9	19.7	47.3	9.8

「とても+わりとそう」の数値。  
カイ二乗検定で有意差(5%水準)がみられた質問項目には\*を付けた。  
4 学校区の数値を比較して、最大値に□、最小値に\_をつけた。

都市部のE学校区は「2. 生活するのに便利」、「3. お祭りなど楽しみなイベントがある」、「4. 転居した人でも、馴染みやすい」の数値が高いことが示されており、そうした都市の利便性や身近なイベントが「地域への愛着」につながっていると推測される。F学校区は、「2. 生活するのに便利」や「3. お祭りなど楽しみなイベント」の数値が低いわけではないが、自然や文化、地域社会への馴染みやすさなどの面で、物足りなさを感じているようでもある。

地方部に位置するG学校区やH学校区で「1. 自然が豊かである」の数値が多いのは予想通りとしても、G学校区では半数が「6.これから発展していく雰囲気がある」とし、H学校区では半数が「5. 文化が豊かである」としていることは地域の環境や雰囲気を物語るデータとして興味深い。

さて、先に見た【子ども調査】ではE校とG校との類似性とE校とF校の相違性を指摘したが、興味深いことに、地域住民に「地域(まち)での人間関係」をたずねた表4にも、同じような傾向がみられる。

地域での人間関係に関する質問への回答では、E学校区とF学校区の数値には10から20ポイントもの差があり、両者の結果はかなり相違している。他方で、E学校区の数値は、「1. 自分はこの地域の一員であると感じる」と「5. 地域で、悪いことをしている子どもを

見かけたら、注意する」はG 学校区と、「2. 地域に自分の居場所がある」と「4. 家族ぐるみでお付き合いをしている友だちがいる」はH 学校区と、よく似た傾向を示している。

さらには、E 学校区は「6. 地域で趣味やボランティアの活動をしている」で、他の学校区より 10 ポイントほど高い数値を示していることも注目したい。

表 4 地域(まち)での人間関係 × 学校区 (%)

	E 学校区 (n=130)	F 学校区 (n=147)	G 学校区 (n=149)	H 学校区 (n=110)
1. 自分はこの地域(まち)の一員であると感じる*	62.0	<u>43.9</u>	61.7	<u>71.4</u>
2. 地域(まち)に「自分の居場所」がある*	63.1	<u>42.9</u>	45.6	<u>64.0</u>
3. 地域(まち)で、良いことをしている子どもを見かけたら、ほめてあげる*	55.4	<u>47.0</u>	<u>47.0</u>	<u>62.2</u>
4. 地域(まち)に、家族ぐるみでお付き合いしている友だちがいる*	<u>56.6</u>	35.6	<u>32.2</u>	54.3
5. 地域(まち)で、悪いことをしている子どもを見かけたら、注意する*	<u>43.4</u>	<u>32.2</u>	42.9	38.9
6. 地域(まち)で趣味やボランティアの活動をしている*	<u>50.0</u>	<u>29.9</u>	38.9	24.3

「とても+わりとそう」の数値。  
カイ二乗検定で有意差(5%水準)がみられた質問項目には \* を付けた。

4 学校区の数値を比較して、最大値に、最小値に\_\_をつけた。

こうしたデータを見ると、「都市部」「地方部」という地理的社会的な環境の違いよりも、人びとが「自分は地域の一員」であり、地域に「居場所」や「活動の拠点」があると感じているかどうか、「エートス」を理解するうえで重要だと言えるのではないか。

#### (4) 教育への関心と地域差

続いて、地域住民の学校教育への関心についても考えていきたい。

表 5 は「地域の学校について知っていること」を地域住民にたずねた結果である。

表 5 地域の学校について知っていること × 学校区 [ \* 母集団は「小学生の子ども・孫はいない(N=368)」 ] (%)

	E 学校区 (n=106)	F 学校区 (n=81)	G 学校区 (n=97)	H 学校区 (n=78)
1. 校区(通学区)の範囲*	<u>70.7</u>	<u>49.4</u>	57.7	69.5
2. 学校の歴史や校風*	<u>63.6</u>	<u>26.3</u>	34.0	49.6
3. 学校が地域と一緒にしている活動*	<u>39.3</u>	21.3	16.5	<u>9.9</u>
4. 学校行事の日程*	17.8	<u>22.2</u>	11.3	<u>3.7</u>
5. 校長先生の人柄*	14.0	<u>25.9</u>	<u>9.3</u>	12.2
6. 教育活動の特色*	<u>33.6</u>	16.3	<u>3.1</u>	3.7
7. 今、学校が抱えている問題	<u>2.8</u>	4.9	5.2	<u>8.5</u>

「よく+わりと知っている」の数値。  
カイ二乗検定で有意差(5%水準)がみられた質問項目には \* を付けた。

4 学校区の数値を比較して、最大値に、最小値に\_\_をつけた。

地域住民には、当然ながら小学生の保護者や小学生の孫と同居する祖父母も含まれる

が、ここでは、「子どもや孫の有無」と「地域性」を分けて考えるために、「小学生の子ども・孫はどちらもない」サンプルを取り出して、4つの学校区を比較することにした。E 学校区と F 学校区では対称的な傾向が示されているのは興味深い結果である。すなわち、E 学校区では、「1. 校区(通学区)の範囲」は7割が、「2. 学校の歴史や校風」は6割が、「3. 学校が地域と一緒にしている活動」や「6. 教育活動の特色」でも3~4割が「よく+わりと知っている」と回答している。E 学校はCSに指定されて7年が経過しており、こうした数値の背景には学校運営協議会などによる情報発信や地域との協働の積み重ねがあるように思われる。

他方、F 学校区は「1. 校区(通学区)の範囲」や「2. 学校の歴史や校風」で4つの学校区でもっとも低い、「4. 学校行事の日程」では一番高い。関係者にヒアリングをすると、F 学校では校長(当時)が率先して地域にさまざまな働きかけをしており、そのことが「5. 校長先生の人柄」を知っている割合の高さにもあらわれていると言えそうだ。

最後の表 6 は、「学校にどんなことを望むか」を学校区で比較した結果である。

東日本大震災以降、人びとの防災意識が高まっているからか、「1. 地域防災の拠点になってほしい」は E 学校区と F 学校区で7割以上と高いことがわかる。災害はどの地域でも起こり得るが、人口密度が高く、住民同士の関係が希薄になりがちな都市部において、公立学校にはそうした期待が強いのかもかもしれない。

表 6 地域の学校に対する期待 × 学校区 [ \* 母集団は「小学生の子ども・孫はいない(N=368)」 ] (%)

	E 学校区 (n=106)	F 学校区 (n=81)	G 学校区 (n=97)	H 学校区 (n=78)
1. 地域防災の拠点になってほしい*	<u>76.6</u>	72.4	66.0	<u>53.3</u>
2. 学校は子どものしつけや生活指導に力を入れてほしい	61.3	<u>50.6</u>	<u>74.2</u>	60.0
3. 子どもの学力をつけることに専念してほしい	50.5	<u>39.5</u>	<u>52.6</u>	51.3
4. 保護者や住民が気軽に立ち寄れる学校にしてほしい	<u>58.9</u>	<u>47.4</u>	47.9	57.3
5. 生涯学習の拠点になってほしい	48.6	<u>38.7</u>	<u>54.6</u>	50.0
6. 授業に地域の話題や教材を入れほしい*	49.5	<u>31.6</u>	<u>54.6</u>	52.6
7. 地域住民の力をもっと活用してほしい*	52.8	<u>34.7</u>	40.2	<u>54.7</u>
8. 地域への情報発信に力を入れてほしい*	40.0	<u>34.2</u>	<u>50.0</u>	44.7
9. 教職員はもっと地域の行事や活動に参加してほしい	32.1	<u>30.7</u>	<u>48.5</u>	41.9
10. もっと家庭教育(保護者)の支援をしてほしい*	28.3	<u>24.3</u>	<u>44.3</u>	34.7

「とても+わりとそう」の数値。  
カイ二乗検定で有意差(5%水準)がみられた質問項目には \* を付けた。

4 学校区の数値を比較して、最大値に、最小値に\_\_をつけた。

だが、それ以外の項目では異なる傾向も見られる。すなわち、F 学校区では「6. 授業に地域の問題や教材を」、「7. 地域住民の力をもっと活用」、「8. 地域への情報発信」など、学校と地域の連携・協働を積極的に求める声は3割程度に止まる。解釈は慎重に行わなくてはならないが、こうした数値には、学校と地域住民の関係の一端が現れていると言える。

では、地方部はどうだろう。G 学校区では、学校の基本的な役割である「2. 学校は子どものしつけや生活指導」と「3. 子どもの学力をつけることに専念」の数値が高いとともに、「5. 生涯学習の拠点に」や「6. 授業に地域の問題や教材を」など、学校が地域（あるいは家庭）に積極的にいかかわるような項目の数値が高いことが特徴である。また、H 学校区は、「7. 地域住民の力をもっと活用」をはじめ、「4. 保護者や住民が気軽に立ち寄れる学校に」や「6. 授業に地域の問題や教材を」の数値が高く、学校から声がかかるのを持っているような印象もある。

#### (5) まとめ

本調査から得られた主な知見は3つある。1つめは「地域」の「多様さ」である。このことは「地域とともに子どもを育てる」ためには、それぞれの地域の実情や特性を重視しなくてはならないという、当然のことを改めて思い起こさせる。そのため、同じ自治体内で一律に教育政策を進めるようなやり方では、それがどんなによいものであったとしても、「地域に根ざした学校」をつくることは難しいと言えるのではないか。

2つめは、地域の「多様さ」を超えてみられる、ある種の「共通項」である。今回の調査研究では、地理的・文化的な側面から「都市部 - 地方部」を比較する枠組みを考えていたが、単純な対比はできなかった。つまり、同じ東京S区のそれほど離れていないエリアであっても、E 学校区とF 学校区では子どもの体験や地域住民の教育への関心・行動は異なっていた。むしろ、E 学校区は、地方部のG 学校区やH 学校区での人びとのかかわりや活動に共通項が見られた。このことは、暮らす環境やライフスタイルは異なっても、人びとを結びつける核となるものが似ていれば、地域の「エートス」も同じようなものとなる可能性を示している。

3つめは、そうした「エートス」を「地域に根ざした教育」に向かわせるものについてである。今回の【子ども調査】や【地域住民調査】では、都市部に位置するE校の子どもたちと地域の大人たちのかかわりが密であること、また、住民の学校情報への感度や子どもの学びへの期待が高いことが印象的であった。その背景にはさまざまな要因があると思われるが、E 学校がCSとして7年の活動実績があることを忘れてはならない。E 学校のデータからは、地域の「エートス」を踏まえてCS活動が展開していけば、CSは「エートス」を「地域に根ざした教育」へと向かわせる「装置」となることが期待できるのではないか。

今後も、さまざまな学校や地域でのケーススタディを重ねていきたい。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 5 件)

1. Fumika YAMAMOTO, In Pursuit of an Ethical Principle for Low-dose Radiation Exposure after 3.11, Journal of Philosophy and Ethics in Health Care and Medicine, 査読有、8、2014、88-111

2. 山本史華、日常と疑似形而上学：ポスト3.11の新たな見取り図のために、東北哲学年報、査読有、29、2013、95-110

3. 井上健、学校運営協議会は学校にどんな変化をもたらすのか、東京都市大学共通教育部紀要、査読無、7、2013、55-71

4. 山本史華、日常のありか：放射性廃棄物と脳死への倫理的応答、思索、査読無、45(2)、2012、345-365

5. 山本史華、脳死臓器移植におけるこどもの意思：自己決定を促すための二つの提案、東京都市大学共通教育センター紀要、査読無、5、2012、139-153

〔学会発表〕(計 3 件)

1. Fumika YAMAMOTO、An Ethical Consideration of Low-dose Radiation Exposure after 3.11, 2014 International Conference of the Japanese Association for Philosophical and Ethical Researches in Medicine, 2014年11月24日、東洋大学(東京都)

2. 山本史華、日常と疑似形而上学、東北哲学会、2012年10月20日、東北大学(宮城県)

3. 山本史華、こどもに脳死臓器移植問題を教えるということ、日本医学哲学・倫理学会、2011年11月5日、東京大学(東京都)

〔図書〕(計 1 件)

1. 井上健・稲葉景、日本アスペクトコア株式会社、2011-2014 年度学術研究助成基金助成金研究成果報告書：地域に根ざした教育の現状に関する調査 子どもと大人、都市部と地方部の比較を視野に、2015、111

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

取得状況(計 0 件)

〔その他〕

ホームページ等 なし

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

山本 史華 ( YAMAMOTO, Fumika )  
東京都市大学・共通教育部・准教授  
研究者番号：20396451

##### (2) 研究分担者

井上 健 ( INOUE, Takeshi )  
東京都市大学・共通教育部・教授  
研究者番号：40259726

稲葉 景 ( INABA, Kei )  
白百合女子大学・文学部・講師  
研究者番号：60599041